



## 郵便屋さんの公園



ギルド・ホール

「ロンドン」と聞くと、金融人は、The Cityと呼ばれる<sup>けんそう</sup>喧騒なビジネス街のことをまず思う。

この街は、ローマ帝国の外れに造られたLondiniumが基となっている。イギリス人はローマ時代から存在していた自国の歴史を誇りに思っているのか、当時の遺跡を殊更大事に保存している。中世に入り、王の権力に対抗する自由都市として発展を始めたThe City of London は、その象徴としてギルドホールを街の中心に据える。そして、金融の街は、ヴィクトリア時代の興隆の跡を止める<sup>とど</sup>荘重な建物と現代建築の粋を競い合う高層ビルが、東京でいえば、南北は神田 新橋、東西は外堀 昭和通りの1マイル（約1.6km）四方に<sup>ひし</sup>轟めき合う。

そんな街の中に、実は、130ほどの小さな公園がひっそりと散らばっている。天気の良い季節になれば、街で働くサラリーマンが昼の弁当を広げる場所となる。Postman's Parkはそんな公園の一つで、昔、近所にあった中央郵便局の職員が憩いの場所として<sup>たむろ</sup>屯していたことが名前の由来のようだ。

「ジョージ・リー、消防士、クラーケンウェルの火災現場において意識を失った少女を救い出すも、その際の転倒による傷が致命傷となり死亡、1867年7月26日」、「トーマス・シンプソン、ハイゲイトの池の氷が割れ、多くの人が溺れるのを救助するも、力尽きて死亡、1885年1月25日」等々。

人の命を救うために我が命を捧げた市井の民の名がドルトン製のタイルに焼き付けられ、公園の片隅の壁一面に埋め込まれている。ヴィクトリア時代のイギリスはピアノが中流階級の間に広まった時代でもあるが、それで財を成したピアノ製作会社の御曹司ジョージ・ワッツなる人物が、慈善事業の一つとして、人命救助に自らの命を捧げた市民を顕彰しようと唱えた。ワッツの呼び掛けに世間の反応は鈍く、結局、彼は自費でこの公園に顕彰の碑を並べたという。

The Cityは、貪欲な金融の街だが、同時に、浄罪を求める魂の葛藤の跡も認められる、何とも人間的な<sup>ところ</sup>処である。（日本銀行ロンドン事務所）

Postman's Park



ドルトン製のタイルに焼き付けられた顕彰の碑

